

# ベンガルのバウルのライフヒストリーの研究(1)

村 瀬 智

## 要 旨

本研究は、インド・ベンガル地方の「バウル」と呼ばれる宗教的芸能集団のライフヒストリーの研究である。

個々のバウルのライフヒストリーは、それぞれ個人の経験を表現したもので、それ自体で完結した世界をあらわしている。しかし、ひとりの人間の人生の物語には、その人を取りまく社会の描写があるはずである。ひとりの人間のライフヒストリーは、絵画や写真にたとえば、その人の「肖像」であると同時に、その人に焦点をあわせた「群像」でもある。本研究では、あつめた資料を読者に提示する方法として、「ライフヒストリーの重ね合わせ」という手法を採用する。すなわち、複数のバウルのライフヒストリーを並列させて記述し、ベンガル社会における「バウルという人間集団」を描きだす。

キーワード：ライフヒストリー、マドゥコリ、通過儀礼、カースト制度、世捨ての制度

## 目次

### I. 序

### II. ライフヒストリーの記述

1. 振り子行者
2. 詩人バウル
3. 元バラモン
4. 宿なしバウル  
(以下、次号)
5. 10ルピー・バウル
6. いなかバウル

## 7. 歌姫の息子

### Ⅲ. 跋

## I. 序

本稿は、ベンガルの「バウル」と呼ばれる芸能集団のライフヒストリーの研究である。また本稿は、本論集に6回にわたって掲載された拙稿「ベンガルのバウルの文化人類学的研究」[村瀬：2006、2008、2009、2010、2011、2012]の補遺でもある。

### 1. 研究対象の概略

バウルは、世俗的な意味で非生産的である。彼らは農業労働や工業生産、手工芸作業、商業活動などに、いっさい従事していない。バウルは、一般のベンガル人に経済的に依存し、「マドゥコリ」をして生活費を稼いでいるのである。ベンガル語の辞書は、「マドゥコリ」という語を、「蜂が花から花へと蜜を集めるように、一軒一軒物ごいをして歩くこと」と説明している<sup>1</sup>。すなわち、ベンガルのバウルとは、「みずからバウルと名のり、バウルの衣装を身にまとい、人家の門口でバウルの歌をうたったり、あるいは神の御名を唱えたりして、米やお金をもらって歩く人たち」のことである。バウルは、「門づけ」や「たく鉢」をして生活費を稼いでいるのである。

このマドゥコリの生活は、ひとりの人間が「バウルになる」ためにも、また「バウルである」ためにも、不可欠の条件である。これは彼らが選択したライフスタイルである。そして、このライフスタイルそのものが、彼らが主張する「バウルの道」(バウル・ポト)の基本なのである。バウルの道とは、マドゥコリの生活にはじまり、神との合一というバウルの宗教の究極の目的にいたる道である。彼らは、「バウルは富をもたないこじきです。わたしたちの唯一の財産は、この肉体です。しかし、この肉体には神が住んでおられる。それ以上に何が必要ですか」と語るのである。

### 2. 研究方法

バウルの民族誌的研究を、ライフヒストリーからアプローチするという方法は、もっとも有効な研究方法だとおもわれる。なぜなら、バウルのライフヒストリーは、人びとの行動を規制するカースト制度がいまだに根づよいベンガル社会の、「だれが」「なぜ」「いつ」「どのように」マドゥコリの生活を採用し、バウルになったかを、語っているはずだからである。また、ライフヒストリーの個々のケースは、バウルになった動機や要因

1 *Mādhukarī* : act of begging from door to door like the bee gathering honey from flower to flower. (*Samsad Bengali-English Dictionary*. Second edition, 1987. Calcutta: Sahitya Samsad.)

の幅広さだけでなく、彼らがバウルになってからの適応戦略の多様性も反映しているはずである。さらに、パウルのライフヒストリーは、彼らが自分の人生をどのように意味づけているかをも、語っているはずである。

ライフヒストリーを採集する際のインタビューの方法は、面接者である聞き手の意図によって、「方向づけられたインタビュー」と「方向づけのないインタビュー」のふたつに区別できるという [Langness and Frank 1981: 48]。「方向づけられたインタビュー」とは、「聞き手の聞きたいことを聞くインタビュー」であり、聞き手は、特定の話題を念頭において、ときには質問票を使用しながら、話し手がたえずその話題にそうように誘導して行うインタビューである。これに対し、「方向づけのないインタビュー」とは、「話し手の話したいことを聞くインタビュー」である。この方法により、「話し手が重要だと思っていること」、あるいはすくなくとも「話し手が（聞き手である面接者に）語ることに重要だと考えていること」を知ることができる。さらに、インフォーマントの自発性を重視することにより、「話し手がどのように概念化を行い、自分の人生について考えているか」を知ることができる。

インタビューに際して、わたしは話し手の話を方向づけないように努力した。しかし、聞き手であるわたしは、インタビュー中もっと聞いてみたいと思ったことをメモにとり、後日のインタビューの機会にはどしどし質問した。したがって、話し手の話が、話し手と聞き手との「対面的な相互作用」によって、意外な方向に展開することもしばしばあった。

本研究では、あつめたライフヒストリーを読者に提示する方法として、「ライフヒストリーの重ね合わせ」という手法を採用する。すなわち、その社会に住む人びとの複数のライフヒストリーを並列させて、ベンガル社会における「バウルという人間集団」を描き出すという手法である。

ライフヒストリーの重ね合わせという手法は、ライフヒストリーの「どの側面を注目」するかによって、ふたつのもちいられ方があろう [小林 1994: 71-73]。ひとつは、ライフヒストリーの「ヒストリー」に注目して、ライフヒストリーを重ねていくやり方である。たとえば、ライフコース法のように、「世代」をキータームとして、複数の人生をたばねていく方法がある。この場合、ライフヒストリーにふくまれる誕生から現在の時点にいたるまでの時間的なながれ、あるいは年齢的な秩序が重視される。ライフコース法のようにヒストリーの側面を重視して、ライフヒストリーを複数あつめて量的にあつかえば、それは一般化をめざす「法則定立的調査」となるだろう。

もうひとつは、ライフヒストリーの「ストーリー」性に注目し、本人のことは尊重して「語り」を記述し、並列させていく方法である。この場合、いろいろな話題をつぎつぎに鎖状につなげて構成し、複数のライフヒストリーをならべて提示すれば、それぞ

れのライフヒストリーは、ひとつの完結した「経験の物語」となる。このように、ライフヒストリーをストーリーとしてとらえる立場からすると、ライフヒストリーは「口述の自伝的な物語」であり、語り手が自分の過去の経験を表現した内容そのものが考察の対象となる。すくなくともライフヒストリーのストーリー性に注目する場合は、一般的な類型化を志向するのではなく、個性的で独自なところを描くことをめざす「個性記述的調査」となるはずである。

個々のバウルのライフヒストリーは、それぞれ個人の経験を表現したものであり、それ自体で完結した世界をあらわしている。しかし、ひとりの人間の人生の物語には、その人を取りまく社会の描写があるはずである。ひとりの人間のライフヒストリーは、絵画や写真にたとえば、その人の「肖像」であるであると同時に、その人に焦点をあわせた「群像」でもある。

本研究では、複数のバウルのライフヒストリーを並列させて、ベンガル社会における「バウルという人間集団」を描きだす。複数の「ライフヒストリーの重ね合わせ」があらかにはすることは、単に「内部者の視点」や「内側からみた文化」だけではない。おなじコミュニティに属する人のライフヒストリーが並列されることで、内部者同士の「経験の物語」も、じつに個性的なものであると気づくのである。このような「個性記述的調査」は、一般化や類型化をもとめる「法則定立的調査」では切捨てられるような独自性を、むしろ個性的な様相として重視して描こうとするものである。

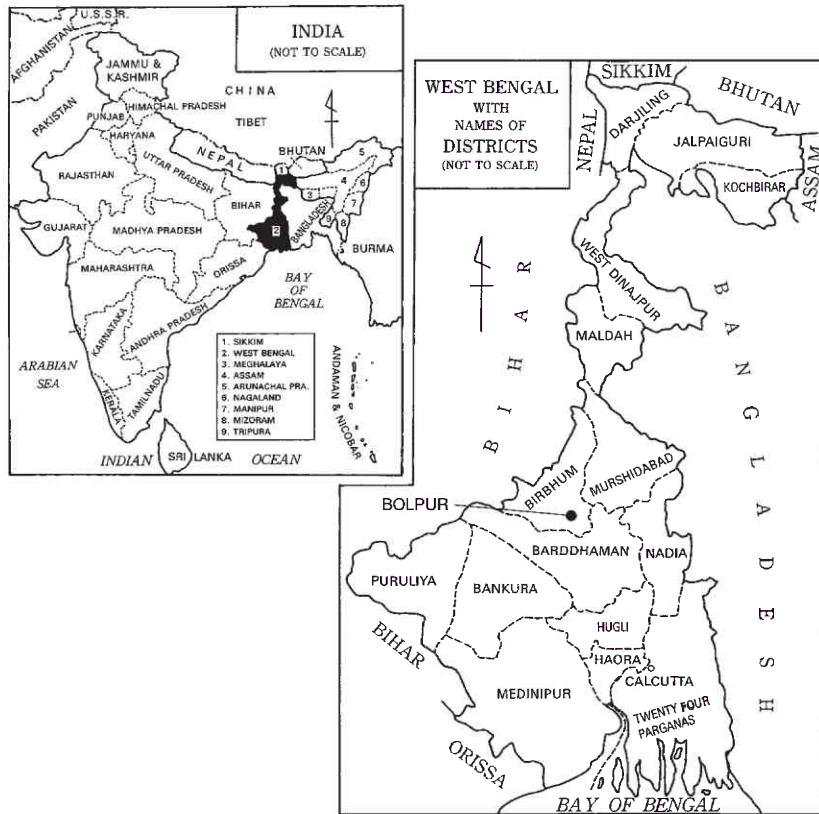
本研究の「Ⅱ. ライフヒストリーの記述」では、7人のバウルのライフヒストリーを紹介する。語り手の「語り」を強調するために、聞き手の「質問やあいづち」を省略した。しかし、これら7編のライフヒストリーは、バウルとわたしで「共同制作された作品」である。わたしは、バウルの語りの「聞き手」であり、また語られた話の「編集者」であり、さらに読者に提示する立場にある。わたし自身の人類学者としての素養やベンガル文化についての知識が、ここに収録された作品に影響を与えていると思う。したがって、7編のライフヒストリーの文責は、すべてわたしにあることはいままでもない。

### 3. フィールドワーク

本研究の資料は、1983年以来、断続的に14回にわたって滞在したインド・西ベンガル州における文化人類学的な調査による。滞在期間は合計約38ヶ月で、それぞれの調査期間は、①1983年5月から8月まで、②1985年5月から8月まで、③1987年6月から1989年1月まで、④1992年2月から3月まで、⑤1998年7月から9月まで、⑥1998年12月から1999年1月まで、⑦1999年7月から9月まで、⑧2002年8月から9月まで、⑨2003年8月から9月まで、⑩2004年7月から8月まで、⑪2005年8月から9月まで、⑫2006年

8月から9月まで、⑬2007年8月から9月まで、そして⑭2009年2月から3月までである。予備調査は①と②で、本調査は③で、そして補足的調査は④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭で行った。

テープレコーダーを利用したインタビューに応じてくれたのは66名である。このうち、男性の「パウル」は59名、女性の「パウリニ」は5名である。これに加えて、以前パウルだったが現在はそうでない「元パウル」が1名、そしてパウルのグルに入門し、サドゥナ（宗教儀礼）の実践に努力する「在家の信者」が1名存在する。インタビューのテープおこしは、ヴィシュヴァ・パーラティ大学の学生4名に協力してもらい、わたしのベンガル滞在中にすべて行った。



地図1：インドおよび西ベンガル州

出典：Tourist Map of Bengal

## II. ライフヒストリーの記述

### 1. 振り子行者

#### 1-0. はじめに

ビルブム県のジョイデブ・ケンドゥーリ村は、オジョイ川の北岸に位置している。こ

の村は、12世紀のサンスクリット詩人ジャヤデーヴァ (Jayadeva) の生誕地として有名である<sup>2</sup>。またこの村は、この詩人の経験した「奇跡」によりヴィシュヌ派の聖地となった。その奇跡とは、ジャヤデーヴァがガンジスの女神に告げられて以来、ガンガー (ガンジス川) の水は、ポウシュ月 (12月中旬～1月中旬) の最終日に、水系的にはつながりのないオジョイ川に流れこむと信じられているのである。

ジョイデブ・ケンドゥーリ村は、ベンガルにおけるもっとも有名な定期市のひとつ「ジョイデブ・メラ」の開催地である。ジョイデブ・メラは、毎年、ポウシュ月の最終日をはさんで、数日間つづく。メラ開催中、ベンガルの地方の町や村からメラ会場行きのバスがひっきりなしに出る。ふだんはひっそりとしたジョイデブ・ケンドゥーリ村は、聖なるガンガーの水が流れこむオジョイ川で沐浴しようとあつまった巡礼客であふれるのである。

ジョイデブ・ケンドゥーリ村のホリ・ダシュ・バウル (Hari Das Baul) は老バウルである。正確な年齢は彼自身にもわからないが、おそらく80歳前後であろう。彼は、昔から「振り子行者」(Halakanpa Baba) という愛称で呼ばれている。「振り子行者」という愛称が暗示するように、彼は脳性小児マヒの後遺症に苦しんでいる。以下は、「振り子行者」の物語である。

### 1-1. ビルバマンガルの聖者

わたしはプルリア県のラドゥルカ村で生まれました。わたしの父は物納小作人でした。しかし父は、村でいろんな雑用もしなければならぬ立場でした。わたしが16歳か17歳のとき、両親はあいついで亡くなりました。

少年時代、わたしは、ひとりの聖者 (サードゥー) と顔なじみになりました。その聖者はジョイデブ・ケンドゥーリ村の隣の村のビルバマンガル村の人で、ときどきわたしたちの村にやって来ては、賛歌のキールタンをうたったり、「神の御名」<sup>3</sup>を唱えたりしながら「マドゥコリ」をしていました。わたしの両親は信心ぶかい人で、その聖者の姿を見ると、いつも施与していたのをおぼえています。

わたしは、生まれつきの脳性小児マヒで、いつもこうして身震いしています。ですから、ふつうの仕事はできません。両親の死後、わたしは、しばらく「カカー」(父の弟)

2 ジャヤデーヴァの代表作『ギーター・ゴーヴィンダ』(『牛飼いの歌』の意)は、ヴィシュヌ神の化身である牧童クリシュナと牛飼いの女ラーダーとの官能的恋愛を主題にしたサンスクリット抒情詩。古典サンスクリット文学の最後をかざる作品であるといわれる。また、この田園豊かな恋愛抒情詩の背後には、神と人間との関係の暗示があるとの解釈がなされ、この神秘的意義によってヴィシュヌ崇拝者の絶賛を博し、いわゆるヴィシュヌ派文学の先驅をなすものといわれている。

3 「神の御名」(Harinâm)とは、ヴィシュヌ神 (Hari) の化身であるクリシュナ神 (Krishna) とラーマ神 (Rama) の御名 (nâm)。すなわち、“Hari Krishna Hari Krishna, Krishna Krishna Hari Hari, Hari Rama Hari Rama, Rama Rama Hari Hari”を、詠唱すること。

の世話になりました。しかし、突然ころがりこんできた不具者のわたしは、そこではやっかい者でした。わたしは、人の情けにすがって物乞いをして生活してゆかねばならないと痛感しました。わたしは、宗教者としてどこかの「アーシュラム」(道場)で暮らしたいと思いました。何の心配もなく、信仰と礼拝の日々をすごしたいと思ったのです。このようなわけで、ビルバマンガルの聖者に、彼のアーシュラムに住まわせてほしいと懇願しました。親切にも、彼はわたしの願いをかなえてくれたのです。それは、わたしが18歳のときのことでした。

ビルバマンガルの聖者は、わたしの宗教上の「グル」ではありません。彼はわたしの「主人」か「雇い主」のような人でした。ビルバマンガルに来てから、わたしは毎朝近所の村々をまわり、一軒一軒、「神の御名」を唱えてマドゥコリをしました。聖者には、「マタマ」(「母上」、すなわち聖者のパートナー)がいました。彼らはわたしに、マドゥコリに出かけるかぎり、一日に一定量以上の金品を集めるようにとノルマを課しました。しかし、これはつらい課題で、わたしを苦しめました。村人の喜捨は、それが何であれ、「神からいただいたもの」と感謝して受けとるだけです。わたしは村人に、「もっとたくさん恵んでください」と要求することはできません。

聖者は牛を飼っていました。牛の世話はわたしの仕事でした。そのほか掃除や洗濯、水くみ、薪あつめなど、アーシュラムの雑用はすべてわたしの仕事でした。そうこうするうちに、マタマは出産しました。その子の子守もわたしの仕事でした。

聖者のアーシュラムは、品性のよくない人たちのたまり場でした。彼らは、いつもわたしの病気をからかって、雑談の種にしていました。「サードゥー・ババ。あの助手をどこで発見したのですか。あのいつも身震いしている不具の少年、なかなかいいじゃないですか。不具の子は、マドゥコリの名人なのでしょう。あの子がすることといえば、マドゥコリに出かけているか、それともああして身震いしながら用事をしているかじゃないですか。しかもあの子は、何ひとつ不平をいわない」。

わたしは動作もにぶいし、ことばも不自由です。しかし彼らは、わたしが彼らの会話のすべてを理解しているということを、理解していないようでした。

わたしは、「この病気は、一生わたしを苦しめるのだろうか。神はこのあわれな不具の少年を、気の毒とと思ってくださるのだろうか」と、何度も自問しました。そして、ビルバマンガルに来て3年ほど経過したころ、わたしの苦痛はここでは解消しないと、やっと気づきました。

ある日、わたしは聖者にいいました。「父上。わたしには親がのこした家屋敷があります。それを処分するために、一度プルリアに帰ろうと思います」。「それはよい考えだ。家屋敷など修行のじゃまだ。そんなもの売り払ってしまいなさい。売れたらすぐにここに戻ってきなさい」と、聖者はこたえました。



そして、まさに出発のその日、わたしは聖者に、旅費・交通費としていくらかお金がほしいとお願いしました。しかし彼は、「こじきに旅費・交通費など必要ない。おまえは物乞いをして、その金を工面しなさい」と、わたしの願いをしりぞけました。わたしは聖者のことばに失望しました。それでもわたしは、聖者の前にひれ伏し、両手で彼の足にふれて、「プロナム」を行いました<sup>4</sup>。しかし、心のなかでつぶやきました。「ああ、ビルバマンガル！ここは安住の地とはなりませんでした」。こうしてついに、わたしはこの聖者のアーシュラムを去ったのです。

## 1-2. ビジョイ・クリシュナ・ゴスワミ師

ビルバマンガルに滞在中、わたしは目を患ったひとりの少年を看病しました。さいわい少年の眼病はまもなくなおりました。少年の住むベタ村は、オジョイ川をはさんでビルバマンガル村の対岸にありました。わたしは、プルリアの故郷にかえる途中、その少年に別れのあいさつをするために、ちょっと立ち寄りました。しかし彼は、もう一日、もう一日と、わたしを引き止めました。わたしは彼の家数日滞在したのですが、その村で結局5年間も生活することになりました。なぜなら、当時、その村にアーシュラムをもっていたビジョイ・クリシュナ・ゴスワミ師の祝福を受けたからです。師は、現在、バルドマン県のマランディギ村のアーシュラムに住んでおられます。師は、わたしよりいくつか年長で、いまでもお元気です。わたしは、いまでもときどき師を訪ねます。

ビジョイ・クリシュナ・ゴスワミ師は、わたしを導いてくれたグルです。わたしはこの偉大な人物から「ディッカ」（入門式）と「ベック」（世捨て人の身分への通過儀礼）を受けました。また師は、わたしの「シッカ・グル」（宗教的トレーナー）でもあります。師はヨーガ行者で、ヨーガの坐法や呼吸法を教えてくださいました。また師は、クリシュナ神の敬けんな帰依者で、クリシュナ神の偉大な「マントラ」を授けてくれました。

師は、「これらのマントラを唱えながらヨーガの修行に努力すれば、おまえの体の内部からショクティ（力）が自然にわき出てくる。おまえの体は、ヨーガの修行で必ずなおる」と、病気の後遺症で苦しむわたしを力づけてくれました。実際、師のいわれたとおりとなりました。わたしの体は、速度のおちた自転車のように、右に左にといつも不安定に揺れ動きます。しかし、以前はもっとひどく、自分で起きあがることさえできませんでした。またわたしは、ふつうの道は歩けますが、田んぼのあぜ道はどうしても歩けませんでした。わたしは神に感謝しなければなりません。ビジョイ・クリシュナ・ゴスワミ師のおかげで、わたしの体はずいぶんよくなりました。

---

4 「足の塵を拝する」こと。ヒンドゥー教徒の、目上の人に対するもっともていねいなあいさつ。



『バガヴァッド・ギーター』<sup>5</sup>のなかで、クリシュナ神は「何ごとも顧みることなく、各自の本分をつくすなら、それは解脱への道である」と、説いています。わたしがベックの通過儀礼を受けたとき、ビジョイ・クリシュナ・ゴスワミ師は、わたしの本分、すなわちわたしの仕事を説明されました。

「おまえに割り当てられた仕事は、神の御名を広めることだ。神の御名を唱えながらすべての人に近づき、すべての人を神の王国へと導く仕事だ。そしておまえはひたすら神に帰依し、結果は神にゆだねて行動せよ」と、説明されたのです。

師はさらに、わたしの仕事は「チョイトンノ・マハブラブ」<sup>6</sup>のされた仕事と同じであるといわれました。つまり、わたしの仕事は、「カーストの差別をとりのぞき、すべての人に希望の光を与えること。大昔から軽視されつづけてきた人たちの意欲や意識を高めること。人類全体の幸福のために、社会に新しい秩序を与えることなのだ」と、説明されたのです。この師のことは、わたしの心を揺さぶりました。

### 1-3. ハリジャン・アーシュラム

ビジョイ・クリシュナ・ゴスワミ師が、マランディギ村に新しいアーシュラムを設立されたとき、わたしも彼と一緒に移住したいとお願いしました。もちろん、師はわたしの願いをしりぞけませんでした。しかし彼は、「師弟関係というものは生涯にわたるものであり、今こそ自立しておまえの仕事をはじめのよい機会である」と提案されました。

わたしは師の助言にしたがいました。そして、ジョイデブ・ケンドゥーリ村からすこし西の、ティカルベタ村の「バグディ・カースト」<sup>7</sup>の集落に住みはじめました。ひとりの親切的なバグディが、「モノシャ女神」<sup>8</sup>を祀った礼拝小屋を提供してくれたので、そこに住むようになったのです。

わたしは、毎朝、日の出前に「神の御名」を唱えながら村中の家を巡回するのが常でした。オジョイ川の船頭をしていた男性が、しばしばわたしを訪ねてきました。彼は「パロク・バジャン」と呼ばれる宗教的奉仕活動をしていました。それは、村中の男の子に食事をふるまうもので、いわば定期的に「少年たちのための宴会」を開催していたのです。わたしはその宗教的雰囲気が気に入ったので、彼に協力するようになりました。

5 『バガヴァッド・ギーター』は、古代インドの大叙事詩『マハーバーラタ』の一部をなす宗教・哲学的教訓詩編。略して『ギーター』ともいう。

6 チャイタニヤのこと。ベンガルのヴィシュヌ派の開祖。真のヴィシュヌ教徒は、ひたすら神にすがるべきであるとし、カーストの区別なく入信を許した。

7 バグディ・カースト (Bagdis) は、中・西部ベンガルの、農業労働、漁労、船頭などを生業とするカースト。バグディ・カーストの社会的地位は低い。

8 モノシャ (Manasa) は、蛇そのものが神格化した女神で、蛇を制し毒を消す力をもつとされる。ベンガル地方でさかんに祀られ、雨季 (5月中旬～9月中旬) には毎月きまった日に祭りが行われる。

わたしは少年たちをあつめて、賛歌のキールタンや楽器の演奏法を教えました。楽器といっても、小さなシンバルや太鼓などの打楽器、指ではじく一弦楽器の「エクターラ」、小脇に抱えて爪（ピック）ではじく二弦楽器の「グブグビ」などの簡単な楽器です。それらは村人たちがいつも演奏しているものです。わたしは少年たちを音楽隊に組織し、賛歌をうたいながら村から村へと出かけるようになりました。まだ幼児だったシュディール・ババ（シュディール・ダシュ・バウルのこと）は、いつもわたしについてきたものです。

このようにして、わたしはバグディ・カーストの集落で11年間、社会の底辺に住む人たちと一緒にすごしました。その間、まだ漠然としたものでしたが、ある計画を心のなかであたためていました。それは、「ハリジャン・アーシュラム<sup>9</sup>」という名の、わたし自身のアーシュラムを設立するという計画です。

ティカルベタ村のバグディ・カーストの集落からジョイデブ・ケンドウーリ村に移住したのは、もう40年以上も前のことです。最初は、ディワリカナート・バッタチャルヤ師のアーシュラムに、そのあと「カンガール・キャパ<sup>10</sup>」のアーシュラムに宿をもとめました。

カンガール・キャパのアーシュラムは、「タマル・タラ・アーシュラム」（「黒い木にかくれたアーシュラム」の意）とよばれていました。アーシュラムの名前にふさわしく、そこには巨大な「パニヤン樹<sup>11</sup>」がしげり、昼でもうすぐらく、ひんやりとしていました。樹幹の根元には、黙想するための空間がつけられていました。そこは、ほんとうにすてきな空間で、ヨーガの修行には理想的でした。わたしはすっかりその場所が気に入ったので、カンガール・キャパに、アーシュラムの敷地内に小屋をたてさせてほしいとお願いしました。親切にも、師はわたしの願いをかなえてくれました。そしてわたしは、カンガール・キャパの献身的な在家の弟子から、材木や竹、わら、金物などの建材だけでなく、労働力まで提供してもらったのです。それは一部屋だけの泥壁の小屋でしたが、わたしは自分のアーシュラムをもつことができたのです。もちろんわたしは、その小屋に「ハリジャン・アーシュラム」と命名しました。わたしは、ベンガル暦1370年（1963－1964 AD.）に、この場所に、現在のこの建物を新築するまで、約18年間そこに住みました。今、ラム・ババ（パゴール・ラム・ダシュのこと）が住んでいるところは、かつてわたしの場所だったのです。

9 「神の子たちのアーシュラム」の意。インド独立の父マハトマ・ガンディーは、不可触民のことを、「ハリジャン」（神の子）とよんだ。

10 カンガール・ゴスワミ師のことで、「狂人カンガール師」の意。ベンガルでは、狂人のような宗教的態度の人は、より神に近づいた人とみなされ、「狂人」を意味する「キャパ」や「パゴール」という語は、たいへん敬意のこもった語なのである。

11 別名「ベンガルボダイジュ」。インド原産のクワ科の常緑樹。樹高は30メートルに達し、樹幹はふとく生長力がつよい。枝から多数の柱状気根をおろして横に広がり、一株で森のようになる。

#### 1-4. バウルの歌とサドゥナ

ジョイデブ・ケンドゥーリに移住してからも、わたしは「神の御名」をひろめる仕事をつづけました。シュディール・ババ、ラム・ババ、ションプ・ババ（ションプ・ダシュ・バウルのこと）たちが、あいついでわたしの活動に加わりました。しかし、わたしの活動は中途半端で、何となく物足りなさを感じていました。

「マドゥコリ」の生活することは、たしかにバウルの本分として不可欠の部分です。しかし、「バウルの道」の究極の目的地に到達するためには、「サドゥナ」（成就法）と呼ばれる宗教儀礼を実践しなければなりません。このサドゥナの実践もまた、バウルの本分として不可欠の部分です。このふたつは、分離することのできない、表裏一体のものだと思います。「バウルの道」を歩むということは、このふたつの本分をはたすことです。ビジョイ・クリシュナ・ゴスワミ師から学んだヨーガは、わたしの「サドゥナの実践」にたいへん貢献しました。しかし、師が教えてくれたのは、主として「マドゥコリの生活」です。

わたしにバウルの歌や宗教を教えた人、つまりわたしのもうひとりの「シッカ・グル」は、ナラヤン・ダシュ・バウルです。わたしは彼のことを、いつも「ジャマイ・ダ（婿殿）<sup>12</sup>」と呼んでいました。なぜなら、彼はプルリア県のサラシ・ババの弟子だったからです。プルリア出身のわたしにとって、プルリア出身でない彼は、「婿殿」のようにおもえたからです。彼とわたしはほぼ同年齢でした。あるいは、わたしのほうがいくらか年長だったかもしれません。いずれにせよ、わたしたちはほんとうに親しかった。このような親密な関係だったからこそ、わたしはバウルの歌や宗教を学べたのだと思います。

バウルの宗教は、バウルの歌に表現されています。しかし、バウルの宗教や儀礼には秘密の事があるおおいので、その秘密をうたいこんだバウルの歌には、しばしば「意図的な語句や表現」（サンダー・パーシャ）が使用されます。このためバウルの歌は、部外者にとっては難解で、いくつもの解釈が可能だったり、あるいは意味不明のことがおおいのです。バウルの歌には、隠された「真の意味」があるのです。

「ジャマイ・ダ」はバウルの歌をほんとうによく知っていました。しかし、わたしが歌詞の「真の意味」を質問しても、質問に直接こたえないのが常でした。彼の応答の仕方は、わたしの質問に関連する別のバウルの歌を1曲うたい、ヒントを与えるという方法でした。後日、彼から学んだバウルの歌の「真の意味」を確かめると、彼はいつも、「そのとおり、正解だ」といって、また別の歌を教えてくれるのでした。このようにして、わたしはたくさんのバウルの歌を学びました。バウルの歌は、部内者にとっては「なぞ

12 「ジャマイ」は、ベンガル語の親族名称で「娘の夫」。「ダ」は、ベンガル語の接尾辞のひとつで、親しい男性の固有名詞や親族名称につけて、「呼称」をつくる。

解き」をするようなおもしろさがあります。わたしは、すっかりバウルの歌に魅了されてしまったのです。

人はバウルの歌をうたうだけではバウルになれません。大事なことは、バウルの歌を通じてバウルの宗教や儀礼を学ぶことです。そして、学んだことを実践することです。わたしはバウルの歌を通じて学んだバウルのサドゥナ（成就法）を、あの泥壁の小屋でひそかに実行しはじめたのです。

ジョイデブ・メラは、バウルにとってもっとも重要な祭です。毎年メラの時期になると、各地の偉大なバウルがジョイデブ・ケンドゥーリ村へやってきました。ニタイ・キャパ、ノボニ・キャパ、トリボンガ・キャパ、ディナボンドウ・ダシュなどの有名なバウルです。ノボニ・キャパの息子のプールノ（プールノ・チャンドラ・ダシュのこと）は、まだ変声前の子供でした。ニタイ・キャパの弟子のショナトン（ショナトン・ダシュ・バウルのこと）は、まだ青年だった。彼らはわたしのアーシュラムで、昼も夜も関係なく、それこそ一日中バウルの歌をうたったものです。彼らは、音楽的な技量やバウルの歌の知識を、たがいに競いあっているようでした。

ミーラ・モハンティという名のバウリニがいました。彼女は、メラの時期をはさんで、わたしのアーシュラムに数週間滞在するのが常でした。彼女は、偉大なバウルがうたう歌を、かるい手拍子をうちながら、静かに聞いているのが常でした。しかし、彼女はときどき、バウルの歌を数曲、立て続けにうたったものでした。彼女のうたう歌はどれも難解でした。「意図的な語句や表現」があちこちに含まれていたのです。あのプールノの父でさえ、ときには彼女がうたった歌の「真の意味」をつかみかねていました。しかし、わたしにはすべて理解できました。「ジャマイ・ダ」がそのような歌をたくさん教えてくれていたからです。

#### 1-5. グルと弟子

わたしが何人の弟子をもつのか、正確な数字はわたしにもわかりません。おそらく千人以上でしょう。しかし、わたしの弟子の大部分は家庭をもった世俗の人びとです。わたしの「ハリジャン・アーシュラム」の名がしめすように、彼らの大半は社会の底辺におとしめられている人たちです。

わたしにはバウルの弟子はすくないのですが、それでもこの地域に住むバウル全員が、直接あるいは間接的にわたしの弟子だといえるでしょう。バウルのなかでも、シュディール・ババ、ションプ・ババ、ラム・ババの3人は、わたしの40年来の弟子です。しかし、バウルの弟子といってもピンからキリまでいろいろです。バウルが自分の「エクターラ」を調律するように、わたしは弟子に指示を与えて、彼が「バウルの道」の本分をはたせるように指導します。しかし残念ながら、わたしの教えることが理解できない者もいま

す。彼らはパウルの歌の背後にある「真の意味」を理解しないで、まるで「九官鳥」のようにパウルの歌をうたっている。もっとも、パウルの歌を九官鳥のようにうたうだけの「ガエク・パウル」（歌手パウル）は、昔にもずいぶんいました。彼らは「パウルの道」の一步か二歩でとまってしまったのです。「パウルの道」を追求し、パウルのサドゥナを実践する「サドック・パウル」になるには、それなりの感受性が必要だということです。

「パウルの道」を追求するには、グルの「指導」と弟子の「努力」が必要です。グルと弟子との関係は、全面的に信頼しあった人間と人間とのぶつかりあいです。グルも弟子も、たがいに自分をさらけださなければなりません。隠しだてをしたり、恥ずかしがったりするのは禁物です。

わたしのシッカ・グルが、みんなわたしとほぼ同年齢だったことは幸運でした。わたしは彼らと、たいへん親密な関係をきずくことができました。とくに「ジャマイ・ダ」とはそのような関係でした。わたしはサドゥナに関することを質問するのに、何のためらいも感じませんでした。しかしわたしは、今やすっかり老人になってしまった。わたしは若いパウルに対して「世代の差」を感じてしまいます。「逆もまた真なり」だと思います。彼らはわたしに質問したいと思っても、わたしの前ではためらってしまうのでしょうか。

わたしには「孫」がひとりいます。血のつながりという点からいえば、彼はわたしの孫ではありません。彼は「わたしの弟子の息子」です。しかし、グルと弟子との関係は、父と息子との関係と同じというわれわれの認識では、彼はわたしの孫です。だから彼は、わたしのことを「じいちゃん」と呼びかけるのです。

わたしの「孫」は、健康で利発な子でした。その孫がすくすく成長して、みごとなパウルになりました。ゴール・ホリ・ダシュ（Gour Hari Das）といいます。彼は、「本物の」パウルになるように子どものころから訓練されたので、「並の」パウルでは、とても彼には太刀打ちできません。わたしも、彼がもの心つくころから知っていることは何でも教えました。彼はまだ30代前半の若いパウルですが、彼こそわたしの後継者にふさわしい。わたしは、わたしに存在した責務のすべてを、今では彼にゆだねています。もしご希望なら彼を紹介しましょう。わたしが使者を送れば、彼はここにやってきます。そして、パウルの宗教や儀礼のすべてを教えることができるでしょう。

## 2. 詩人パウル

### 2-0. はじめに

「振り子行者」が語ったように、彼の40年来の弟子に3人のパウルがいる。すなわち、シュディール・ダシュ・パウル、シヨンブ・ダシュ・パウル、そしてパゴール・ラム・

ダシュである。この3人には、いくつかの共通点がみとめられる。それらは、(1)彼らが、社会階層の下層、あるいは最下層のカースト出身であること、(2)子どものころに父親と死別していること、(3)父親の死後、きびしい貧困生活を経験したこと、(4)10代のときに振り子行者の活動に参加したこと、そして(5)振り子行者が彼らの人生に決定的な影響を与えたこと、などである。ここでは、この3人のパウルのなかから、ジョイデブ・ケンドゥーリ村のパゴール・ラム・ダシュに登場してもらって、彼の話聞くことにしよう。

パゴール・ラム・ダシュ (Pagol Ram Das) は、「詩人パウル」である。彼は、1931年生まれの一見もの静かなパウルである。しかし、自作の歌をうたうときの彼には、巨大なバニヤン樹のような力強さが感じられる。胸に秘める情熱を歌に託して表現しているのであろうか。

## 2-1. 第一歩

わたしはバルドマン県のバルバリシャ村で生まれました。わたしは「パウリ・カースト」<sup>13</sup>出身です。父は日雇いの農業労働者でした。しかし、父は病気でずっと寝たきりでした。

わたしは子どものころから音楽がたいへん好きでした。わたしはすでに自分の楽器「グブグビ」をもっていました。わたしは音楽好きのあつまりに参加し、そこで歌をうたったり、踊りをおどったりしたものでした。隣村の「カナイ・バブ」がリーダーでした。<sup>14</sup>

ある日、カナイ・バブがわたしを迎えに家まできました。わたしは病床の父に、「カナイ・バブが迎えにきてくれた。ほくは歌をうたいに行きたい。彼と一緒にいきたい」と、許可をもとめました。そのとき、父はしばらくわたしの顔を見つめ、「おまえは、将来、歌をうたわねば食べてゆけないだろうな」と、いいました。わたしはまだ子どもでした。わたしには父のことばが理解できませんでした。数日後、わたしは帰宅しました。しかし、わたしは父の顔を再び見るできませんでした。父はわたしが11歳のときに亡くなりました。

父の死後、わたしの家はますます貧しくなりました。ある日、兄がわたしにいいました。「もしおれがおまえのように歌を習っていたら、おれは歌をうたって稼ぐことができるのに。おまえは歌をうたい、それで食べてゆけるではないか。おおくの人がこの村にやってきて、歌をうたいながら米やお金をもらっているではないか。おまえは何をためらっているのだ」。

兄のことばは刺激的でした。さっそく「ジョラ」(肩にさげる布袋)を自分で作り、

13 パウリ・カースト (Bauris) は、西部ベンガルで、興 (こし) かつぎ、農業労働、土工などを生業としたカースト。パウリ・カーストの社会的地位は非常に低い。

14 「バブ」は、ベンガル語の接尾辞のひとつで、年長の男性の固有名詞につけて尊称をつくる。

翌日には愛用のグブグビをもって出かけました。それがわたしのマドゥコリの「第一歩」でした。人びとは、「すばらしい道を歩みはじめたのですよ。つらくても、けっしてこの道を放棄してはいけませんよ」と、励ましてくれました。しかし、マドゥコリをすることはどうしても恥ずかしく、長つづきしませんでした。

## 2-2. 結婚

父の死後まもなく、わたしは結婚しました。妻もパウリ・カースト出身でした。わたしたちの結婚は、双方の親族同士の取り決めによるものでした。結婚式は伝統にしたがって行われました。

さて、わたしたちは結婚しましたが、まだ幼い少年と少女でした。しかし、わたしは食べるために働かねばなりませんでした。わたしは、かつて父がしていたように、農業労働をして生活費を稼ぎました。日の出から日没まで、ただ命じられるまま、家畜のように働きました。夜になって数曲の歌をうたうのが、わたしの唯一の楽しみでした。

## 2-3. 振り子行者

ある日、わたしは「振り子行者」と出会いました。彼は仲間と一緒にわたしの村にやって来たのです。彼らは「神の御名」を唱えてマドゥコリをしていました。また、彼らは村の一角でパウルの歌もうたっていました。わたしは愛用のグブグビをかえて家をとびだしました。

このとき、振り子行者はわたしに、パウルの歌を一曲教えてくれました。彼は、まずその歌詞のすべてをゆっくりと語り、そのあと歌詞の一節一節をゆっくりとくりかえしました。わたしは一節一節、彼のあとについて復唱しました。そして、わたしが歌詞をおぼえると、彼はわたしにその歌をうたわせました。わたしがうたっているあいだ、彼は手拍子を取り、まちがうと訂正してくれました。彼がパウルの歌をたいへんよく知っているということに、すぐに気がつきました。わたしは、カーストの存在そのものを否定するパウルの歌がすっかり気に入って、振り子行者にもっと歌を教わりたいと思いました。

振り子行者は、その後わたしに入門を許し、パウルの歌だけでなく、ヨーガの坐法や呼吸法も教えてくれました。そして、わたしがパウルの歌を通じてパウルのサドゥナに興味をもつようになったころ、わたしは全面的に「パウルの道」を追求したいと思いました。わたしは振り子行者に、世捨て人の身分への入門式である「ベック」を要請したのです。しかし、彼は、「現時点では、ベックをわたしに求めないほうがよい。おまえはそれを、もうすこしあとでわたしのグルから受けたほうがよい。結婚している者にとって、この道を追求するのは容易なことではない。おまえには、ベックを受ける前に、ま



だ学ばねばならないことがある」と、わたしの要請を断りました。そのあとすぐに、わたしは振り子行者の一团に加わったのです。そのとき、わたしは16歳か17歳でした。

#### 2-4. 作詞活動

わたしは子どものころ学校に行けませんでした。家がたいへん貧しかったからです。しかしカナイ・バブが、小学校1年生用の教科書を与えてくれました。彼がわたしに文字を教えてくれたのです。彼のおかげで読み書きができるようになったのです。

振り子行者の一团に加わって間もなく、わたしはパウルの歌の小さな歌集を入手しました。むつかしい単語はカナイ・バブに説明してもらいました。わたしはその歌集を何度も読みました。また、その歌集のすべての単語のつづりを何度も地面に書いて勉強しました。今でもその歌集の最初から最後まで暗唱することができます。また、歌をうたっているパウルに出会くと、わたしは彼のうたう歌をじっと聞いておぼえ、あとでうたってみました。今ではなかなかそんなことはできませんが、その当時は記憶力がよかったのでしょうね。

このようにして、パウルの歌を勉強しながら、わたし自身が作詞をするようになりました。数えたことはありませんが、今までに千曲以上は作ったと思います。

#### 2-5. 息子と娘の死

わたしが17歳のときに、わたしたちに息子が生まれました。しかし、息子は1年もたたないうちに死にました。その後、わたしが19歳のときに娘が生まれました。しかし、その娘も8歳で死にました。

振り子行者の一团に参加してから、わたしはしばしば家を留守にすることがありました。息子が死んだとき、近所の人たちがわたしにいました。「おまえさん、今のわるい習慣をやめなきゃいけないよ。父親がしょっちゅう家をあけるから息子が死んだんだ」。息子はたしかに死にました。しかし、息子の死とわたしの頻繁な外出とは無関係です。近所の人たちはそれをこじつけて、わたしの追求しはじめた道を妨害しているのだ、と思いました。

まわりの人はみんな、わたしの娘をかわいがってくれました。娘は生まれつき虚弱な子でした。娘は長生きできないと、ずっと感じていました。息子について娘の死も見届けるのは、親としてつらいことです。わたしは娘の臨終には立ち会いたくなかった。神はわたしの願いをかなえてくださいました。娘が死んだとき、神はわたしを娘から追い払いました。わたしは娘が死ぬ前に外出しました。そして、わたしが留守をして12日目に、娘は死にました。娘がイラム・バジャール病院で死んだその瞬間に、神はわたしに娘の死をお告げになりました。わたしはそのとき、娘の臨終のその瞬間に、歌を一曲作

りました。

わたしの家はオジョイ川の堤防のすぐそばにありました。わたしが帰宅したとき、義理の母や妹たち、それにほかの親戚の人たちは、家の前の道端に座っていました。彼らはわたしの姿を見ると泣きはじめました。わたしの娘の名はカルパナといいます。彼らはすすり泣きながら、「カルパナちゃんが死んだのよ」と、いいました。「そう、それがどうした。……それでなにか不都合があるのか。……泣くな!」と、心にもないことをいってしまいました。そしてわたしは、笑いながら家に帰ったのです。

その時期は渇水期で、オジョイ川の水量はそれほどおおくありませんでした。わたしは河原に腰をおろし、娘の死の瞬間に作曲した歌をうたいました。悲しみを忘れるためにその歌をうたいました。川岸からわたしを見守っていた人たちは、涙をながして泣いていました。彼らを見て、わたしもまた泣きだしました。生きることもままならなかった娘の運命が、ふびんでならなかったのです。河原にひとりで座っているあいだに、娘の記憶が、次から次へとわたしの脳裏にうかびました。

振り子行者は、以前、わたしの娘に新しいドレスを買ってくれました。何年かたって、そのドレスは古くなっていました。それは「マカール祭」<sup>15</sup>の前日のでき事でした。娘はその辺を、あちらこちらと歩き回っていました。彼女はそのドレスを着ていました。しかし、そのドレスはまだ彼女にぴったりしていました。なぜなら、娘は生育がおそく、なかなかおおきくならなかったからです。それは夕方5時ごろでした。遊びつかれた娘は、わたしのところにやってきました。わたしはベッドに横たわっていました。彼女はわたしのうしろに来て、わたしをのぞきこんでたずねました。

「父さん」。

「なあに」。

彼女は同年齢の少女にくらべてたいへん小柄だった。

「どうして、横になっているの。おなかがすいたの」。

「いいや。おなかはすいてないよ。今日は1年でいちばん夜のながい日だ。夜があげると、明日はおおきなお祭りだ。しかし、おまえには新しいドレスがないからね」。

彼女はわずかにうなずきました。そして、すぐに大声でさげびました。

「父さん!起きて!起きてよ、父さん!わたしのドレスのことなど、ちっとも心配しなくていいのよ」。

ヒラルル・オディカリという名の「クラ・グル」がいました。彼のクラ・グルという身分は世襲で、彼の家は何代も前から、わたしたち一家の「宗教的ガイド」でした。娘

15 「マカール」(梵makara)は、ヒンドゥー教や仏教の教典に出てくる空想上の巨魚で、ヒンドゥー天文学では十二宮のひとつとして「磨かつ宮」と名づけられている。「マカール祭」は、冬至の日におこなわれる。

が死んでもなく、わたしはチョイトンノ・マハプラブの生誕地（ナディア県のナヴァドヴィップ）への巡礼を計画しました。そのとき母は、「もしこの時期に、息子がナヴァドヴィップに出かけたら、いったい何がおこるだろう。息子は出家をして二度と帰ってこない。嫁は一生ほうっておかれる」と、嘆きました。

そのすぐあと、クラ・グルがわたしをよびつけました。そして、「おまえは今まであちこち出かけ、しょっちゅう家をあけていたではないか。今、ナヴァドヴィップへ行くことは許さない。家で謹慎していなさい」と、命令しました。そういう事情で、わたしは髪をそりおとし、自宅で謹慎していました。しかし、これはわたしにもっと苦痛を与えました。

わたしは、これから何をすべきかと考えていました。わたしたちはこの世に生まれおち、つかの間の人生をおくっています。ときには、ひとりの「バウリ」としてカーストの義務をはたすことの不条理さに抗議を表明し、しかし、すべてをわすれようと努力しながら、わたしは依然としてわたしに割り当てられた「バウリ」という地位と身分にとどまっていました。

クラ・グルは、以前、ある物語をわたしに語りました。「バウリは、最初はごく普通の地位に位置づけられていた。しかし、彼らは神々の宴会の食べ物盗もうとしたので、バウリの地位は最低にまで降格した」。

また、クラ・グルは別の物語も語りました。「バウリは、婚礼行列の輿（こし）かつぎに雇われた。しかし帰り道、彼らはその輿を売りとばし、その金で酒をのんでしまった。さらに彼らは、神聖なものを汚したと非難するバラモンに、集団で暴行をくわえてしまった。これが、それ以後バウリを社会の最下層カーストのひとつに位置づける根拠となった」。

しかし、この不名誉なことをしでかした者たちの「物語」の責任を、わたしがとらねばならないのでしょうか。ただ、わたしが「バウリ」に生まれたという理由だけで、わたしに責任があるのでしょうか。

人は、それが何であれ、自分の「生まれ」（カースト）を拒否できないといわれています。そして、自分に割り当てられた「カーストの義務」（ダルマ）をはたすのが最善だといわれています。振り子行者はこれを否定しませんでした。しかし、昔、彼はわたしにいいました。「ムチ・カースト<sup>16</sup>の人も、清浄になる権利がある。そして、たとえムチでも、心からクリシュナを崇拜すれば、人はクリシュナになれる」。

わたしは、振り子行者の教えにしたがう人たちは、だれも他人のカーストに興味をも

16 「ムチ・カースト」(Muchis) は、ベンガルにおける、草屋、靴屋、楽器屋などの職業を生業とするカースト。ムチ・カーストの社会的地位は、社会階層の最下層のなかでも、別格の「ボトム」と位置づけられている。

たない、ということを知りました。振り子行者のアーシュラムの名前が、「ハリジャン・アーシュラム」だということにも納得しました。わたしは、「パウルの道」を、さらにふかく追求すべきだと思いました。わたしは振り子行者に、わたしのこれからの人生について相談しました。そして、ふたたびマドゥコリの生活を始めたのです。そのとき、わたしは27歳でした。

## 2-6. グルの道

娘の死後、わたしは妻とともに、正式に世捨て人の生活様式を採用しました。わたしは振り子行者に、世捨て人の身分への通過儀礼である「ベック」を要請しました。わたしが10年ほど前にそれを要請したとき、振り子行者は、まだその時期ではないと断りました。しかし今回は、「今こそ、おまえはベックを受けることができる。わたしのグルのアーシュラムに、おまえを案内しよう」といって、わたしの願いをかなえてくれました。

こうして、わたしは妻と一緒に、ビジョイ・クリシュナ・ゴスワミ師から「ベック」を受けたのです。わたしたちは師から、それぞれ新しい「ビッカパトラ」(こつじきの鉢)を受け取りました。わたしはそれに加えて新しい「ドリ・コウピン」(ふんどし)を受け取りました。わたしたちは、心からよろこびを感じ、神に祈りました。「神よ！どうか、これ以後は、子どもを授けないでください」。

こうして、俗人「ラゾモイ・パウリ」は「パゴール・ラム・ダシュ」に、わたしの妻は「ラニ・バラ・ダシ」にと、それぞれ改名しました。彼女はそれ以後、寡婦のように「白い衣服」を身につけるようになりました。そして既婚婦人の髪のわけ目の「シンドウール」(朱印)をぬぐいさり、腕輪などの装身具もはずしました。おおくの村人が、「あれ、まあ、なんてこったね。白い衣服で、頭にシンドウールもない。きっと夫に不幸がおとずれるよ」といって、彼女を非難しました。わたしは、「もしそれが不吉というなら、災難が身に降りかかるのはこのわたしでしょう。それなら、それが本当かどうか、わたしが確かめてみましょう」と、反論しました。

いずれにせよ、わたしたちは一緒に生活していましたが、「ベック」を受けた時点から、わたしたちの夫婦関係を精算しています。わたしたちの関係は、ひとりの「パウル」と、ひとりの「パウリニ」が、一緒に生活しているだけです。それは、「夫」と「妻」という「夫婦関係」ではなく、「ナエック」と「ナイカー」という「恋人同士の関係」です。恋人同士の関係であるわたしたちには、もはや子孫をのこす必要がありません。いや、むしろ、子孫をのこしてはいけないのです。

このことは、村人たちにはおそらく理解できないのでしょう。わたしたちは村を去るべきだと思いました。さもないと、わたしたちの宗教がひどい目にあう、と思いまし

た。こうして、わたしたちはジョイデブ・ケンドゥーリ村の、かつて振り子行者が住んでいた小屋に移住したのです。

おおくの人がわたしのことを、「ラゾモイは、ヴェーダの法（ヴェディカ・ダルマ）を逸脱して、世捨て人の土地（ボイラギヤ・パラ）に行ってしまった」と、いいます。ヴェーダの法が教えることは、人生の目的は社会生活における義務（ダルマ）を遵守し、結婚して家庭生活を営むことだ、ということです。

それではいったい、何が「義務」なのでしょう。わたしの場合、パウリ・カーストに生まれましたので、わたしの義務は「他者の土地を耕すこと」でした。そして、結婚してからは、わたしの義務は「子孫をのこすこと」でした。わたしは両方とも実践しました。しかし、両方ともわたしに「苦痛」を与えました。

今、わたしが歩んでいる「パウルの道」では、まずカーストの義務を放棄し、そして、神との合一を達成し神を実感することを、究極目標と考えます。ここでは、わたしの義務は「神を賛美し、神を知ること」です。この義務を果たすことは、苦痛ではなく、「よろこび」です。

わたしたちは、今ではふたりきりです。アーシュラムに食べ物がなくなれば、わたしたちのどちらかが近隣の村に出かけ、マドゥコリをします。わたしたちには、日々の生活をいとなむのにそれで十分です。わたしたちは富をもたない「こじき」です。わたしたちの唯一の財産はこの肉体です。しかし、この肉体には神が住んでおられる。それ以上に何が必要ですか。

若いころ、わたしはさまざまな「ファンクション」に積極的に参加したものです。ファンクションというのは、宗教的祝典や社会的行事に際して開催される音楽会のことです。今でもさまざまなファンクションが、あちこちの村で開催されています。しかし、わたしはもはや、そのようなファンクションに参加したいとも思いません。

マドゥコリをするときに、わたしはパウルの歌をうたいません。門口で「神の御名」を唱えるだけです。わたしがパウルの歌をうたうのは、今日ではこのわたしのアーシュラムだけです。わたしは自分のために、あるいは弟子のために、パウルの歌をうたうのです。

パウルの歌をうたうだけで、人はパウルになれません。パウルというのは、「パウルの道」を歩む人のことです。パウルの道の究極の目標まで到達したいと思う人は、結局は自己鍛練に努力して、パウルの「サドゥナ」（成就法）を実践しなければなりません。そのためには、グルの「導き」が必要です。パウルの道は「グルの道」です。

### 3. 元バラモン

#### 3-0. はじめに

ラムプールハートは、ビルブム県北部の商業と行政の中心地である。ここは交通の要所である。ラムプールハート駅は、長距離列車の特急停車駅であり、ローカル列車の始発・終着駅である。またこの駅は、100年以上も前から、蒸気機関車の燃料や水の補給機基地であり、インド国営東部基地の重要な保守・点検基地なのである。

ラムプールハート駅の裏手に、スリファーラという村がある。この村には7人のパウルが住んでいる。彼らは、ふだんはそれぞれがマドゥコリの生活をしているのであるが、ときどき音楽チームを編成しパウルの歌を音楽会で演奏する。音楽チームのリーダーは、ニタイ・ダシュ・パウルである。ニタイは、この地域では有名な「ガエク・パウル」(歌手パウル)である。彼の魅力的な歌だけでなく、すてきな笑顔と温厚な人柄にひかれるファンもおおい。そのニタイが、伴奏者こみで音楽会に招待された場合に、音楽チームが誕生するのである。

1952年生まれのアルン・ゴスワミ・パウル (Arun Goswami Baul) は、この音楽チームの太鼓奏者である。彼の出身カーストはバラモンである。以下は、この「元バラモン」が自分のアーシュラムをもつにいたるまでの物語である。

#### 3-1. 少年時代

わたしはビルブム県北部のノルハティで生まれました。わたしが2歳半のときに、妹が生まれました。しかし、母は産後の肥立ちがわるく、妹がまだ生後21日の乳児のときに死にました。母の死後、「マシ」(母の姉妹)が妹を育ててくれました。マシが出産後の授乳期だったことは、妹にとって幸運でした。わたしは母方の祖父母に育てられました。

わたしの父はバラモン司祭者でした。母の死後まもなく、父はラムプールハートに転出し、そこで再婚しました。父はときどき<sup>17</sup>面会に来てくれました。わたしが13歳のとき、父は入門式の「ウパナヤナ」をしてくれ、わたしに「聖紐」をつけてくれました。

祖父母は熱心なボイシュナブ(ヴィシュヌ教徒)でした。祖父母の家では、毎日朝夕に、打楽器を打ちながら「神の御名」を詠唱する「ナム・キールタン」が勤行されていました。わたしも祖父母の横にすわってお勤めをしました。また年に1度か2度は、おおぜいの人に食事をふるまう「モホットショブ」(宗教的宴会)も開催されました。

17 「ウパナヤナ」は、ヴェーダ学習の資格を得るための入門式。本来は重要な通過儀礼であったが、新たな教育制度ではヴェーダ学習が行われないので、結婚式の直前にヴェーダ学習に関する一連の儀礼が象徴的に行われたり、バラモン身分を象徴する「聖紐」をつける儀礼としての意味しかもたない場合がおおい。

宴会に招かれるのは、ヴィシヌ派の行者や在家の信者でした。家の中庭で、何百人もの招待客と一緒に食事をする光景は、それは壮観なものでした。さらにモホットショブの日には、数人編成のプロのキールタン歌手が招かれ、「リラー・キールタン」<sup>18</sup>が演奏されるのが常でした。

祖父母はわたしを学校にやりました。わたしは勉強がきらいだったわけではないのですが、なんとなく学校になじめず、3年でやめました。学校をやめたあと、祖父母は音楽好きのわたしに、両面太鼓の「コール」を与えてくれました。わたしはそのコールがたいそう気に入って、朝から晩まで練習しました。コールはすぐに上達しました。そうこうするうちに、プロのキールタン歌手から、コール奏者として伴奏を依頼されるようにもなりました。

わたしが16歳か17歳のとき、祖父母があいついで死にました。祖父母の死後、わたしは父と同居することになりました。父はわたしに、バラモン司祭者としての訓練をはじめました。最初は父の指示どおり、神像に水や花、食物などの供物をささげ礼拝を行う、といった簡単なものでした。やがて、寺院や祭の場で詳細な儀軌にもとづいて執行する礼拝も訓練されるはずでした。

父の家には、父、継母、腹ちがいの弟と妹が住んでいました。しかし父の家はせまく、わたしの居場所がありませんでした。継母は何かにつけてわたしにつらくあたりました。わたしも継母のことを嫌っていました。しかし、わたしの感情を父に伝えることはできませんでした。わたしはしばしば外出しては、あてもなくラムプールハートの町をうろつくようになりました。

ラムプールハート駅裏手のスリファール村に、祖父母と懇意だったラグナンダン・ゴスワミ師というヴィシヌ派の行者がいました。わたしが父の家に帰りそびれたとき、しばしば師のアーシュラムに宿をもとめました。わたしが「今晚とめてください」とお願いすると、師はいつもわたしを大歓迎し、アーシュラムに招き入れてくれました。

わたしが21歳のとき、父が急死しました。父の後継者として、腹ちがいの弟がバラモン司祭者になりました。父の死後、わたしは父の家に寄りつかなくなりました。居心地のよいラグナンダン・ゴスワミ師のアーシュラムに、いつの間にか住みついてしまったのです。そしてごく自然に、わたしはコールをたたいて神の御名を唱え、マドゥコリをして生活するようになりました。

---

18 ヴィシヌ神の化身である牧童クリシュナと牛飼いの恋人ラーダーとの甘美な物語は、神と人間との関係を暗示する「神の遊技 (*lila*)」と呼ばれ、リラー・キールタンの重要なモチーフとなっている。



### 3-2. バッダル・ダ

わたしが22歳のとき、ふとしたきっかけで「バッダル・ダ」と友人になりました。バッダル・ダシュ・パウルのことです。わたしたちは、なんとなく馬が合い、いつも一緒でした。彼と一緒にマドゥコリにも出かけました。彼はパウルですが、門口ではパウルの歌をうたいませんでした。そこでは彼が神の御名を唱え、わたしがコールをたたいて伴奏するのが常でした。

ある日、それはサインティア駅近くの村でしたが、村びとがバッダル・ダにパウルの歌を所望し、わたしたちを中庭まで招き入れました。そのことは、べつに驚くほどのことではありません。そのようなことは今までに何回もあったからです。しかし、わたしが驚いたのは、その村びとがバッダル・ダに、今うたったパウルの歌の「真の意味は何か」と質問したことです。パウルの歌には、隠された真の意味があるのだということを、そのときはじめて知りました。わたしは今まで、パウルの歌をなんとなく聞いていたのです。それ以来、パウルの歌を意識して聴くようになりました。そしてバッダル・ダにいろいろな質問をするようになったのです。パウルの宗教や儀礼について、バッダル・ダはみずからすすんで話題にすることはなかったのですが、彼はすこしずつ語りはじめたのです。

数ヶ月が経過しました。バッダル・ダは、わたしをジョイデブ・メラに誘いました。わたしはメラの独特の雰囲気になんとか興奮してしまいました。そして、メラ終了後も興奮がさめず、さらに数日そこに滞在しました。バッダル・ダはすでにラムプールハートに戻っていました。

わたしは「振り子行者」のアーシュラムで、振り子行者のことを「じいちゃん」と呼ぶ若いパウルに出会いました。彼はわたしに、「ブラーマチャルヤなしには、すべてが不可能である」と力説していました。しかし、わたしにはその意味が理解できませんでした。わたしは以前に、「ブラーマチャルヤ」という語を父から聞いたことがありました。しかし、その語に対する父の使用法は、彼のそれとはちがうように感じました。<sup>19</sup>彼はたいへん印象的な人でしたが、そのときはそれ以上の関係にはなりませんでした。

ジョイデブ・メラの数日後、わたしはラムプールハートに戻りました。そして、バッダル・ダに「ブラーマチャルヤ」という語の意味について質問しました。バッダル・ダは、パウルはその語を「性的エネルギーの制御」と解釈していると、答えました。そし

19 一般的な用法では、インドのバラモン教徒が生涯に経過すべきものとして『マヌ法典』が規定する4つの「アーシュラム」(住期)の、最初の「学生期」をさす。これによると、バラモン教徒、すなわちシュードラを除く上位のヴァルナ(バラモン、クシャトリヤ、ヴァイシャ)は、師のもとでヴェーダ聖典を学ぶ「学生期」(ブラーマチャルヤ)、結婚して子をもうけるとともに家庭内の祭祀を主宰する「家住期」、森に隠棲して修行する「林棲期」、一定の住所をもたず乞食遊行(こつじきゆぎょう)する「遊行期」の4段階を順次に経るものとされ、各段階に厳格な義務が定められている。

て、さらに次のようなことを語りました。

「パウルの道の究極の目的は、人間の肉体に宿る神と合一し、神を実感することだ。そのためにはパウルのサドゥナを実践しなければならない。しかし、そのサドゥナを首尾よく実践するのはむずかしく、ブラーマチャルヤに成功した人だけが可能である。だからパウルは、ディッカを受けて特定のグルに入門し、グルの指導のもとにパウルの宗教や儀礼を学び、ヨーガの修行をして自己鍛練に努力しているのだ」。

バッダル・ダからこのような話を聞くのははじめてでした。それはわたしには今まで無縁の知識でした。神と合一し、神を実感することを究極の目的とする「パウルの道」に感動しました。わたしはパウルの道を追求したいと思いました。わたしはバッダル・ダに、わたしを指導してくれる「グル」（師匠）を紹介してほしいと頼みました。彼はしばらくわたしを見つめていました。そして、「わかった。きみのためにrippanaグルを探してみよう」と、いいました。

数ヶ月が経過しました。その間、バッダル・ダはわたしの将来のグルについてひと言も語りませんでした。

### 3-3. 入門式と最初のレッスン

25歳のとき、わたしは「ディッカ」（入門式）を受けました。入門式はラグナンダン・ゴスワミ師のアーシュラムでおこなわれました。バッダル・ダは、わたしのグルとしてオッドイト・ゴスワミ師を推薦してくれました。師は放浪者のような生活をしています。師はご自身のアーシュラムをもたず、弟子から弟子へと巡回しているのです。このために、バッダル・ダは師と接触するのに数ヶ月もかかったのです。

入門式では、まず師はわたしの耳に「ディッカ・マントラ」を吹きこみました。このマントラによって、わたしは入門を許可され、彼の「弟子」（シッショ）となったのです。そのあと、師はさまざまなマントラを、次々とわたしの耳に吹きこみました。各マントラの音節ごとに、師のあとについて復唱しました。師は、それらのマントラが生涯わたしを守護するといわれました。

翌日、師はわたしの耳に「シッカ・マントラ」を吹きこみました。このマントラによって、彼はわたしの「シッカ・グル」（宗教的トレーナー）となりました。そしてすぐに、最初のレッスンがはじまりました。

わたしは、最初のレッスンで何を学んだのかを、今でもはっきりと記憶しています。まず師は、「パウルの道」の4つの宗教的段階について言及されました。そして、わたしが彼に入門し宗教的トレーニングを受けはじめたのであるから、わたしは今まさに、第1段階から第2段階へ進級したのだと説明されました。

それらの4つの段階というのは、まず最初が「無知の段階」（ストゥール）、2番目が

「準備の段階」(プロボルトン)、そして第3番目が「サドックの段階」です。このサドック段階にはいて、修習者はサドゥナの実践を許可されます。そして修習者が、自分の肉体に住む「心の人」(モネル・マヌーシュ)と呼ばれる神と合一し、神を実感したとき、最後の「成就の段階」(シッディ)に達するのです。

最初のレッスンが終了したとき、師はわたしの指導に全力をつくすと約束されました。しかし同時に、パウルの道の究極の目標に到達するためには、わたしが「自分の精神と肉体の開拓」に努力しなければならない、と明言されました。

オッドイト・ゴスワミ師の弟子となって以来、師は年に数回わたしを来訪し、そのたびに数日滞在されるようになりました。その間に、集中的なレッスンがおこなわれるのです。師はパウルの歌の背後に隠された意味の説明だけでなく、ヨーガの坐法や呼吸法なども教えてくれました。

### 3-4. パートナー

最初のレッスンから2年ほど経過しました。オッドイト・ゴスワミ師はわたしに、「準備の段階」から「サドックの段階」への進級を許可されました。そして、パウルの「サドゥナ」を実践するために、わたしには女性のパートナーの「サディカ」が必要であると、チョンディダシュの物語を語りながら示唆されました。「チョンディダシュの物語」というのは、バラモン階級出身のチョンディダシュと洗濯女ラミーとの愛の物語です。<sup>20</sup>

しばらくして、わたしはラムプールハートの町で、偶然ひとりの女性とすれ違いました。彼女をひと目見るなり、心にぴんとくる不思議な感じがしました。わたしに靈感が働いたのです。わたしは何度か彼女と会う機会をつくり、「本物のパウルになりたい」という、わたしのひそかな夢を打ち明け、わたしのパートナーになってほしいと頼みました。

オッドイト・ゴスワミ師がわたしのところにこられたとき、彼女を師に紹介しました。師はわたしたちを祝福してくれました。そして、わたしたちに「ネックレスとビャクダンのねり粉の贈呈式」(マラ・チャンダン)をするようにと提案されました。

贈呈式は即座におこなわれました。それには、きめられた手順があるわけではありません。わたしは、トゥルシーの茎製のわたしの「ネックレス」(マラ)を彼女の首にかけ、彼女は彼女のものをわたしの首にかけました。わたしは、「ビャクダンのねり粉」(チャ

20 チョンディダシュ (Candidas) は、15世紀初期の詩人で、ベンガルのバクティ (信愛) 文学の先駆けとなった。チョンディダシュが崇拝する女神のバスリは、「ラミーは、だれひとりとして教えることのできない真理をお前に教え、神でさえも導かないような無上の喜びにお前を導くだろう」と告げて、洗濯女ラミーに対する彼の愛に忠実であるように諭した、といわれている [Sen 1986: 115-135]。

21 トゥルシーは、ヴィシュヌ派の人びとが聖草とし、崇拝の対象とする多年草。シソ科のメボウキの一種のカミメボウキで、よく枝わかれし、茎の基部は木質化する。

ンダン)で彼女の額に印をつけ、彼女が同じことをわたしにしました。それで終了です。そのあと、わたしたちは一緒に食事をしました。参加者は、オッドイト・ゴスワミ師、ラグナンダン・ゴスワミ師、パッダル・ダ、そして何人かの友人たちでした。わたしたちは彼らにかこまれて幸福なカップルでした。彼女はわたしの住むラグナンダン・ゴスワミ師のアーシュラムに、その日のうちに移住してきました。

わたしたちは同居するようになったのですが、それは、わたしたちが結婚したという意味ではありません。わたしたちの関係は、「夫と妻」ではなく、たがいに尊敬しあう「サドックとサディカ」であり、恋人同士の「ナエックとナイカー」なのです。わたしたちの目的は、子孫をつくることではなく、サドゥナの実践を通じて、神を実感することなのです。

数日もたたないうちに、ラグナンダン・ゴスワミ師を尊敬する村びとが、アーシュラムにやってきました。そして、この村の何人かが、わたしのことを非難していると伝えてくれました。なぜならば、わたしが不可触民の女性と同棲しているからだということです。わたしは、父からもらった聖紐をいつも身につけていました。聖紐はバラモン身分を象徴するものです。したがって、村びとはわたしがバラモン階級出身だということを知っていました。しかし、わたしのパートナーは、卑しい身分とされる「ドム・カースト」の出身でした。<sup>22</sup>オッドイト・ゴスワミ師はまだ滞在されていたので、わたしは師に助言をもとめました。

「われわれは彼女の出身カーストのことなど気にしない。しかし、もし村びとがおまえのことを不快に思うなら、おまえは彼らに迷惑をかけていることになる。おまえはそのことに敏感でなければならない。息子よ、おまえに解決策を教えよう。おまえたちは、ふたり一緒にベックを受けなさい。ゴサイ・パバ(ラグナンダン・ゴスワミ師)に、ベックを受けたいと頼んでみなさい」。

わたしたちは、ラグナンダン・ゴスワミ師から「ベック」(世捨て人の身分への通過儀礼)を受けました。彼女は、それ以後、色もののサリーではなく白い衣装を身につけ、いっさいの装身具をはずしました。わたしは、師から新しい「ドリ・コウピン」(ふんどし)を受け取りました。翌日、わたしはファラッカ・ダム<sup>23</sup>まで小旅行し、わたしの聖紐をガンガー(ガンジス川)に投棄しました。

22 「ドム・カースト」(Doms)の伝統的な生業は、竹の「かご作り」や、穀物ともみ殻をあおぎわけるうちわの「唐箕(とうみ)作り」である。これらの比較的クリーンな生業であるにもかかわらず、ドム・カースト全体は低い社会的地位を押しつけられてきた。その理由は、かつて一部のドムが、ヒンドゥー教徒の葬儀に際して、火葬用の「積みまき」を組み、点火用の「わら束と火」を喪主に手渡し役目を担っていたからである。一部のドムの不浄な葬儀の奉仕のおかげで、ドム・カースト全体が不本意ながらも低い社会的地位に甘んじているのである。

23 西ベンガル州とビハール州の州境で、ガンガー川をせき止めるダム。鉄道・道路橋としても利用されている。

### 3-5. カナイ・ダ

わたしがオッドイト・ゴスワミ師からディッカ（入門式）を受けてパウルの道を本格的に追求したところ、バッダル・ダは友人のカナイ・マンダルを紹介してくれました。「カナイ・ダ」のことです。カナイ・ダは国営東部鉄道に勤務する公務員でした。彼はもちろんパウルではありません。しかし彼はパウルの歌や音楽の熱的な愛好者でした。わたしたちは馬が合い、しょっちゅう会いました。わたしの住むラグナンダン・ゴスワミ師のアーシュラムが、わたしたちの「たまり場」でした。わたしたちは、会えばいつも気楽に雑談をし、歌をうたい音楽を演奏しました。そして「ガンジャ」（マリファナ）のパイプを回すのが常でした。

それは、わたしがベック（世捨て人の身分のための通過儀礼）を受けてしばらくしてからのことです。カナイ・ダとバッダル・ダが遊びにきました。いつものように、わたしたちは音楽を演奏し、ガンジャのパイプを回しました。その日のガンジャは、ビルマとの国境に近いマニプル産のすばらしいもので、その効き目はびっくりするほどでした。ガンジャのパイプを回して何巡目だったかおぼえていませんが、カナイ・ダが何かを語りはじめました。

「わたしは、バラモンのきみに1カタ<sup>24</sup>の土地を寄付しよう。布施の受納はバラモンの義務であるから、寄付をしたいというわたしの申し出を、きみは拒否できないはずだ。きみはその土地に、きみ自身のアーシュラムを建てることができる」。

わたしは、びっくりしてカナイ・ダを見つめました。「バラモン」…「布施」…「寄付」…「1カタ」…「土地」…「アーシュラム」…ということばが、わたしの頭のなかをぐるぐると回りはじめました。しかし、すぐにわれに返りました。カナイ・ダが、わたしの出身カーストを理由に、1カタの土地を寄付しようとしている。わたしはバッダル・ダに対してすまないと思いました。しかし、わたしはすでにベックの通過儀礼を受けていました。したがって、わたしはもはや「バラモン」ではありません。しかし、わたしはまちがいに「世捨て人」です。バラモンや世捨て人に「布施」や「喜捨」をすることは、世俗の人間の「本分」（スヴァ・ダルマ）と考えられています。世捨て人のわたしは、カナイ・ダの申し出を拒否できないと思いました。そして、彼にいいました。

「カナイ・ダ。わたしの話を聞いてくれ。どうかその土地を「ラーダー・ゴーヴィンダ」<sup>25</sup>に寄付してくれよ。ラーダー・ゴーヴィンダの名で、その土地を登記してほしい。もしその土地がわたしの名前で登記されたら、わたしは物欲にとらわれて、本物のパウルになる努力をおこたるかもしれない。そうなればカナイ・ダの善意が台なしになる。

24 「カタ」はインドの地積の単位。1カタ≒84平方メートル。

25 「ゴーヴィンダ」は、「牛飼いの」の意味で、クリシュナ神の名前のひとつ。「ラーダー」は、クリシュナ神の恋人となった乳しぼり娘。

どうかそうならないようにしよう」。

カナイ・ダは、わたしの提案をよろこんでくれました。わたしはバッドル・ダをちらっと見ました。彼は笑顔で賛意をあらわし、わたしにいいました。「兄弟。きみはカナイ・ダの申し出を拒否してはいけない。そこにきみのアーシュラムを建てたまえ。わたしもおおいに協力するよ」。わたしは、それを聞いてほっとしました。

カナイ・ダは、1カタの土地をほんとうに寄付してくれました。わたしは、材木、竹、わら、金物など、建材のすべてをマドゥコリであつめました。もちろん、バッドル・ダは、献身的に協力してくれました。こうして、わたしの「ラーダー・ゴーヴィンダ・アーシュラム」は、1980年に完成しました。そのとき、わたしは28歳でした。

#### 4. 宿なしバウル

##### 4-0. はじめに

バクレシワールはビルプム県の県都シウリの西18キロに位置する静かな町である。そこはインドに51ヶ所あるといわれる「母神座所」(シャクティ・ピート)のひとつで、シヴァ派とシャクティ派の聖地である。またそこは豊かな温泉の町として有名である。

バクレシワールのナラッタナンダ・ゴスワミ・バウル (Naradananda Goswami Baul) は「宿なしバウル」である。彼は一定の住所をもたず、ひとりで暮らしている。以下は、彼の語る物語である。

##### 4-1. 少年時代

わたしは、1952年、ナディア県のカリンプール村で生まれました。わたしの両親は東ベンガルのファリッドプール出身で、インドとパキスタンの分離独立のすこし前に西ベンガルに移住していました。両親がカリンプール村に定着したとき、父はそこでかなり大きな農地を購入しました。両親は老齢ですが、まだ健在です。わたしは6人キョウダイの2番目で、兄と弟、それに3人の妹がいます。

わたしは子どものころから音楽が好きでした。わたしは学校で勉強するよりも、専門の先生について、本格的に音楽を習いたいと思っていました。わたしは母と一緒に、わたしの希望を父に伝えました。しかし、父はわたしの希望を無視して、わたしを学校に行かせました。子どもだったわたしは、父に逆らうこともできず、10年間学校に通いました。父はわたしが大学に進学するものと思っていました。しかし、わたしは大学進級試験に失敗してしまいました。父は親の期待にそむいたと、非常に怒り、「勉強が嫌いなら働け!」と命じました。わたしは、いくつかの片手間仕事をしました。しかし、一生の仕事にしたいと思えるものは見つかりませんでした。

わたしの兄は父に従順で、つねに父の期待にこたえていました。父のいうとおり、大



学を卒業し、卒業後は小学校の教員になり、まもなく父の取り決めた結婚をしました。

わたしが19歳か20歳のとき、父は何の予告もなく、わたしの結婚の取り決めをしてしまいました。わたしは自分の結婚のことなど考えたこともありませんでした。わたしの友人には親の取り決めた結婚に従った者が何人かいましたが、結婚生活が必ずしも幸福とは思えませんでした。本人の意向を無視した結婚は、人を家庭生活という牢獄に閉じ込めるだけだと思いました。わたしは、生まれてはじめて父に激しく抗議し、父の命令を拒絶しました。父は、「親の意向を無視するような息子は、息子ではない。出て行け!」と、どなり散らしました。

#### 4-2. 自由を求めて

わたしは父の期待するような人生にうんざりしていました。数日後、わたしは家を出ました。そしてパゴール・ビジョイ師を訪ねました。師はヴィシュヌ派の行者で、ナディア県のラナガート村にアーシュラムをもっていました。師は、わたしの住んでいたカリンプル村のだれかの家をととき訪問していたので、わたしは子どものころから師のことを知っていました。師は会うたびにわたしをかわいがり、わたしも師を慕っていました。わたしは師に事情を話し、師のアーシュラムにしばらく滞在したいと懇願しました。師はわたしの願いをかなえてくれました。

わたしはパゴール・ビジョイ師のアーシュラムに約1年間住み込み、ついに師からディッカを受け、彼の弟子となりました。師はわたしに、ナラッダナンダ・ゴスワミという宗教名を授けてくれました。わたしは、今までの人生が終了し、新しい人生がはじまったと思いました。

パゴール・ビジョイ師のアーシュラムに滞在中、やはりアーシュラムに住み込んでいたキョウダイ弟子から音楽の手ほどきを受けました。もともと音楽が好きだったわたしは、さまざまな楽器の演奏テクニックをすぐに覚えました。わたしは小さなシンバル(コルタール)を購入しました。ある日、わたしはそのシンバルをたたき「神の御名」を唱えながら、生まれてはじめてマドゥコリに出かけました。わたしは数時間で、少なからぬ量の米と現金を集めることができました。それは予測をはるかに上回るものでした。そのとき、わたしは心にひらめくものを感じました。

わたしは、昔からいつもどこかへ行きたいと思っていました。わたしは自分の人生を自由に生きたいと思っていました。土地や家に執着し、家庭という牢獄に永遠につながるのだけは避けたいと思っていました。わたしは一所不住の人生を送りたいと思っていました。わたしはパゴール・ビジョイ師に別れを告げ、聖地巡礼の旅に出かけることにしました。そのときわたしは21歳でした。わたしの聖地巡礼の旅は、およそ4年間つづきました。



#### 4-3. バウルとの出会い

聖地巡礼の旅が5年目に入ろうとしていたころ、わたしは西ベンガル州のバクレスチュワールを訪ねました。バクレスチュワールは、「五十一母神座所」のひとつで、シヴァ派とシャクティ派の聖地です。しかし、ワーラーナシー（ベナレス）やガヤーのような有名な聖地とはちがひ、町はひっそりとしていました。そこには水のきれいな小川が流れていました。温泉もわき出ていました。

バクレスチュワールに着いたとき、一時的に寺院に寝泊まりしている巡礼中のサードゥーの姿を見かけました。わたしは「しばらくここに滞在してもいいな」と思いました。わたしはシヴァ神をまつた寺院の片隅に、巡礼者のための小屋があるのを見つけ、そこをしばらくの宿とすることにしました。毎朝、寺院を清め神像を花で飾りました。神像に捧げられた供え物を、「おさがり」（プラサード）として食べることができました。何日か経過しても、わたしの寺院滞在をとがめる人はいませんでした。

バクレスチュワールに滞在してしばらくすると、この地域に数人のバウルが住んでいるのに気づきました。ときどき彼らが個別に歌をうたいながらマドウコリをしているのを見かけました。また、ときどき彼らがグループを組み、一緒にバウルの歌や音楽を演奏していました。彼らはたがいに仲がよく、とても楽しそうに見えました。わたしはバウルの歌にすっかり魅せられてしまいました。

わたしは、過去4年間インド中を放浪し、聖地巡礼の旅を続けてきました。いつも孤独なひとり旅でした。わたしは「この4年間の旅は、あてもなくさまよい歩いていただけなのか」と、自問しました。わたしは、いくつかの楽器の演奏はできましたが、歌はうたえませんでした。わたしはバウルの歌を習いたいと思いました。そして、バクレスチュワールのバウルの仲間に加わりたいと思いました。

しばらくして、わたしはバクレスチュワールのバウルと顔見知りになりました。彼らは最初、わたしのことを「サードゥー」と思っていました。なぜなら、わたしはシヴァ寺院を仮の宿とする一所不住の巡礼者であり、ぼろを身にまとい、髪や髭は伸び放題、そして所持品もほとんどなかったからです。実際、彼らはわたしのことを「サードゥー・ババ」とよびかけました。しかし、わたしのライフスタイルはサードゥーのようですが、わたしは本物のサードゥーではありませんでした。もっとも、わたしがサードゥーとみなされることは、聖地巡礼の旅をつづけるには便利なこともしばしばありました。旅行中わたしの無賃乗車をとがめた車掌はひとりもいなかったのです。しかしわたしは、「一所不住のサードゥーのような行動をやめるのは今だ」と思いました。わたしは、バウルの歌を習いたいというわたし希望を彼らに伝え、仲間に入れてほしいと頼みました。彼らはわたしの意外な要請に驚いた様子でしたが、「OK。きみがその気なら、われわれは大歓迎だ」と、あっさりと許可してくれました。それ以来、わたしはバウルと名のり、

パウルの衣装を身にまとい、パウルの歌をうたうようになりました。

#### 4-4. バクレスワールの生活

わたしはバクレスワールに約12年間住んでいます、わたしは今でも「宿なしパウル」です。わたしはバクレスワール地区内のあちらこちらを、仮の宿を求めて移動しています。現在のシェルターは、バクレスワールの温泉を運営している「西ベンガル州鉱物資源開発公社」の入場券売り場だった小屋です。その小屋はずいぶん前から放棄されたままになっていました。わたしはその小屋を2年以上も不法占拠しています。所有権は公社にあるのですから、もし必要ならいつでも明け渡すつもりでいます。しかし、いまだにだれもわたしに「出てゆけ」とはいいません。

わたしはマドゥコリをして生活しています。マドゥコリの生活は、パゴール・ビジョイ師のアーシュラム滞在時から続いています。しかし、わたしがマドゥコリに出かけるのは、週に2日か3日です。わたしが近隣の村に出かけ、数軒の家で数曲の歌をうたっていることを想像してください。数人の人がわたしに一握りの米、あるいは季節の野菜を与えてくれるでしょう。わたしは1キロか2キロの米や野菜を容易に集めることができます。そのとき、その日のマドゥコリ行動は終了です。ひとりの人間の生活にはそれで十分です。また、わたしがどこかの村の音楽会に招かれ、主催者が200ルピーの謝礼をくれたとします。そうすると、1ヶ月間、わたしはマドゥコリに出かける必要がない。わたしはそのお金で1ヶ月の生活費をまかなうことができるからです。

わたしは以前にはよく料理をしたものです。料理は楽しいし、今でも大好きです。しかし、最近は料理をすることがほとんどありません。ある日、たまたまバクレスワールの食堂で夕食をとろうとしました。その食堂のオーナーは、わたしの歌が大好きでした。食事が終わってお金を支払おうとしたとき、そのオーナーがわたしにいました。

「きみはマドゥコリをして生活している。わたしは世帯主であり、ここで金を稼いでいる。バラモン司祭者に布施をすることと、世捨て人やこじきに施与することは、世帯主としてのわたしの本分（スヴァ・ダルマ）である。世帯主であるわたしは、きみのようなこじきから金をもらおうとは思わない」。

それ以後、彼はいつもわたしに食事を無料で提供してくれます。わたしは彼に対して何の義務もありません。しかし食堂が忙しいときなどは、わたしは自発的に彼を手伝うようにしています。もっとも、そのようなことはめったになく、せいぜい月に一度か二度のことです。

食堂のオーナーは、わたし宛の手紙を引き受けてくれています。なぜなら、わたしは「宿なしパウル」であり、わたしには住所というものがないからです。

バクレスワールに住むようになってから、わたしはときどき家族と連絡をとっていま

す。彼らはときどき手紙をよこします。しかし、彼らはわたしのことを喜んでいません。彼らはわたしのことを、いまだに放浪の旅をつづける「ろくでなし」と思っているようです。兄はわたしに、とにかく家に帰り、そこで音楽活動をすればよいではないかと、手紙で知らせてきました。しかし、家に帰れば「元の木阿弥」になることがわかっています。わたしはここでは自由です。わたしは兄への返信で、家に帰る気がないこと、そして家庭生活を営む気がないことを、はっきりと書きました。わたしはわたしの人生を自由に生きたい。そして、わたしの神へのバクティ（信愛）を継続したい。神へのバクティを表明する歌をうたい、宗教的な人生をおくりたい。そうするために、わたしはパウルになり、マドゥコリをして生活しているのです。

わたしがひとり暮らしの「宿なしパウル」をつづけていることに、なぜなのか不思議に思うかも知れません。そのことについて話しましょう。

わたしの親友のひとりに、ニタイ・ダシュというパウルがいます。彼はバクレシワールのアーシュラムで女性パートナーと一緒に住んでいます。ニタイは、「(「振り子行者」が「孫」と呼ぶ) ゴール・ホリ・ダシュというパウルの弟子です。ニタイを通じて、わたしはゴールと知り合いになりました。ゴールは、かつてわたしに、「神というものは人間の肉体の内部に存在する」と語りました。そのことについては疑問の余地がないと思います。

わたしはゴールの弟子ではありませんが、パウルの宗教の究極の目標は、神と合一し、神を実感することだと聞きました。また、パウルの宗教の究極の目標に到達するためには、「サドゥナ」（成就法）と呼ばれる宗教儀礼を実践しなければならないと聞きました。さらに、サドゥナを実践するためには、男性修習者は、パートナーとして女性修習者が必要だということも聞きました。しかし、人間の肉体に宿る神と合一し、神を実感するために、人間はなぜ別の人間を必要とするのかについては、わたしはまだ納得できないのです。これが、ひとり暮らしの「宿なしパウル」をつづけている、もうひとつの理由です。

#### 参考文献

小林 多寿子

- 1994 「経験の物語と複合的自叙伝—ライフヒストリーの重ね合わせをめぐる」  
『文化の地平線』（井上忠司・祖田修・福井勝義編）70-90頁、世界思想社。

Langness, L. L. and Gelya Frank

- 1981 *Lives: An Anthropological Approach to Biography*. Novate, California: Chandler & Sharp Publishers.

村瀬 智

- 2006 「ベンガルのパウルの文化人類学的研究(1)」『大手前大学社会文化学部論集』第6号、331-349頁。

- 2008 「ベンガルのバウルの文化人類学的研究(2)」『大手前大学論集』第8号、171－188頁。  
2009 「ベンガルのバウルの文化人類学的研究(3)」『大手前大学論集』第9号、253－275頁。  
2010 「ベンガルのバウルの文化人類学的研究(4)」『大手前大学論集』第10号、213－235頁。  
2011 「ベンガルのバウルの文化人類学的研究(5)」『大手前大学論集』第11号、213－228頁。  
2012 「ベンガルのバウルの文化人類学的研究(6)」『大手前大学論集』第12号、263－284頁。

Sen, Dinesh Chandra

- 1986 *History of Bengal Language and Literature*. Delhi: Gian Publishing House.